校長会報

第148号

宇都宮市立戸祭小学校
栃木県小学校長会事務局

発行責任者
松本和士

印刷所
(有)正栄社印刷所

主張 地域とともにある学校経営

栃木県小学校長会副会長
小林　春彦

この柱となるものは、学校と地域との交流と協働である。本校ではふるさと学習を行うとともに、伝統文化の継承という地域のニーズに応えるため、お囃子や太々神楽、盆踊りなどの伝統文化に触れさせることにした。運動会では地元の盆踊りお囃子会の生演奏で、児童が作詞した替え歌を児童が歌い、会場一同で踊った。また、地域の保存会による太々神楽鑑賞やお囃子体験の他、伝統芸能クラブを立ち上げお囃子の練習を行い、保存会との協働も目指している。

同時に、こうしてお世話になっている地域への感謝の心の育成も欠かせない。今年度は、唯一地域の方々の招待が可能な運動会を感謝の会と統合し、「感謝の運動会」というコンセプトで実施した。学校支援ボランティア等お世話になっている方々を招待し、一緒に競技や演技を行い交流し、楽しんでいただいた。日頃の恩返しとして心を込めて交流することで、児童と地域の心は一つになる。

こうした交流と協働により、将来地域の活動に興味をもったときに参加しやすい人間関係が形成され、一人でも多くの後継者や地域の未来を創る人財が育てばよい。子どもたちが将来自ら生活しやすい社会を築くため、学校が人と人とを繋ぐことで、自分の夢の実現に邁進しつつ、地域を愛しその未来を創る人財に育てていきたい。

（芳賀町立芳賀東小学校）

学習指導要領の理念に学校を核とした地域づくりの視点が盛り込まれた。本校では地域創生に尽力することが使命の一つであるとともに、地域の未来を創る人財育成を行うため、学校教育目標に「ふるさとをおもう子」を追加した。地域づくりを手段から目標に変えることで、職員の意識も高まった。

主張 感謝

栃木県小学校長会副会長
木村　努

一昨年から、学校現場では新型コロナウイルス感染症対策に神経を尖らせてきた。一年目は「やるかやらないか」の判断に迫られ、二年目は「どう工夫してやるか」に苦慮した。そして三年目の今年は「最も効果的な新たな形」を模索し、コロナ禍において、より効果的で持続可能な教育活動の在り方を追求している。

どんな状況下におかれても、我々教育現場に携わる者にとって大切なこと、成し遂げなければならない使命は、国や県の方針に基づき、それぞれの学校独自のプランやビジョンを掲げ、課題を明確にして、子どもたちの「学びの保障」を担保することである。具体的には、学びの場の安全確保、学習指導要領の着実な実施、GIGAスクール構想の実現、高学年教科担任制の導入、特別な配慮を要する児童への適切な指導、地域連携、各種学力調査の活用等々を計画的かつ着実に推進することである。併せて管理職の立場にある者は、人材の育成、働き方改革の推進、綱紀の保持にも努めなければならない。校長職の多岐にわたる職務の重大さ、責任の重さはここにある。

私が校長職に就いたときに心に誓ったことは「子どもたちが通いたいと思える学校づくり。保護者が通わせたいと思える学校づくり。教職員が働きたいと思える学校づくり」である。あれもできた、これはこうすべきだったと後悔や反省が残らぬよう、日々全力で取り組むことを誓ったが、常に反省ばかりが残る毎日である。そんな時、校長会の仲間の一言に励まされ、支えられ、また次の一歩を踏み出すことができる。挫けることなく今の自分があるのは同じ志を持つ「仲間」がいたからである。この場を借りて、皆様のお力添えに深く感謝したい。

（足利市立筑波小学校）

創立七十五周年記念式典・研究大会・記念講演会

十一月十日（木）　栃木県教育会館

一　開会

○開会の言葉
　生田　敦　副会長
○会長挨拶
　松本　和士　会長
○来賓挨拶
　阿久澤真理　県教育長

二　研究発表

◇研究テーマ
「教職員の資質・能力の向上を目指した校内体制の充実」

◇発表者
　日光市立大沢小学校
　校長　星　昌志　先生

◇発表内容

Ⅰ　現状と課題

教育ニーズの多様化・複雑化とともに、教職員の指導力がこれまで以上に求められる中、退職者や新規採用者の増加が続き、今後の構成年齢は確実に若年化に向かうと思われる。

このため、教職員の資質・能力の向上を目指す校内体制の充実が喫緊の課題である。

Ⅱ　研究の概要

１　地域の実態と研究の方向性

予測困難な時代を迎えた今、未知な課題に対して、これまで以上に柔軟な発想で対応する必要があり、年齢・経験を超えて教職員が主体的に課題解決を図る校内体制づくりを模索している。そこで、校内体制の充実を図るための校長の関与性や指導性を明らかにしていくこととした。

２　研究内容

①ビジョンの共有

「目的が組織をつくり、目標が人を動かす」と言われることから、校長が示すビジョンは、一目でわかる構造化したリーフを配付し、組織が示す方向性を焦点化した。また、教職員一人一人に目標の具体性をもたせるために教職員評価（目標成果自己評価）に明確な達成点を明記し、意識して取り組めるようにした。

②機能的な組織にする取組

カリキュラム部として教育課程編成や学校評価などＰＤＣＡサイクルに対応した組織を編成し、それぞれにリーダーを据えてチームで実践する組織に再編した。校長は目指す組織文化を具体的に掲げ、行動方針に従ってチームが判断・行動しているかをフィードバックする。こうした取組をとおして、目指す組織文化の醸成を図りながら、組織デザインや機能的な組織の在り方を学ばせていく。

③ミドル組織を活性化する取組

学校経営に係る決定を行う企画委員会の下に「学年主任会」を組織した。ここでは、各学年から出た意見等を検討して、企画委員会（校長、教頭、教務主任）に具申するとともに、企画委員会からの提案に対しても検討・具申している。組織としての意思決定後は、具体策を検討し実行する役割を担っている。こうすることで、学校組織の意思決定が高速化するとともに、ミドル層の教職員が学校経営の意思決定に参画する場となっている。

④外部資源を活用しながら進める授業改善

目指す授業のイメージを明確にすることが授業改善に繋がると考え、校長は授業づくりについて「職員室だより」等で分かりやすく伝えたり、教育委員会や附属小からの外部講師による研修会を実施したりするなどの働きかけを行った。中学校区三校での研究で、重点的に取り組む資質・能力を共有できたことも授業改善への意識向上につながるものとなった。

⑤協働力が高まる組織運営の実践

教職員一人一人の主体性・意欲を引き出すために毎週金曜日にオフサイトミーティングを開催し、キャリア層、世代層を超えて、オープンにコミュニケーションがとれるようにした。また、チェックシートを活用して日頃の取組を可視化し、振り返りを行うようにした。その際、個人の考察や管理職のフィードバックだけでなく、チェックシートで教職員が互いに進捗状況を確認したり、相談や助言を受けたりすることで、目的意識・主体性・同僚性を高めるようにした。

⑥研修パートナーを設ける取組

本校二年目の教員を他の学校のモデルとなる若手教員（メンター）とマッチングし、サポートを受ける研修を行っている。メンターの授業を参観し、該当学年の教材研究のコツやポイント、学級経営の方法等について、具体的なアドバイスを定期的に受けている。校長間で、随時、振り返り等の情報交換を行ってきた。

Ⅲ　研究の成果と課題

１　成果

①個として、さらに組織の一員として、校内研究についての何に取り組めばよいのかが明確になった。

②校長が各組織に意思決定の権限を委譲したことで、自ら情報を収集して課題を設定し、解決策を具申する文化が醸成された。このことにより、教職員が「自分たちで学校を創る」意識へと変化してきた。

③九年間で育成を目指す資質・能力や授業のイメージが明確になったことで、授業改善への機運が助成された。

④組織の一員として、自分が今どの立ち位置なのか進捗状況が分かるようになった。

⑤教師が自分自身の達成感や成長感が得やすいので研究が楽しく感じられるようになった。

⑥同一学年の担任のつながりが構築されたことで、精神的サポートの効果も大きく得られた。

２　課題

教職員の資質・能力の育成や意欲の持続化を図るための、さらなる手立てを模索していきたい。

Ⅳ　提言

校長は、教職員が主体的に

目的意識をもって組織として動くよう、きっかけや仕掛けを講じることが大切ある。

三　講演会

○講師紹介
松本　和士　会長

◇演題　「感性コミュニケーション～男女脳差理解による組織マネージメント力アップ～」

◇講師　黒川　伊保子　先生
感性リサーチ代表取締役
感性アナリスト

◇講演内容

□脳を「電気回路装置」として
脳を電気回路装置として見立てると、人類の秘密が見えてくる。立場が違う二人は、とっさに「違う脳神経回路」をえらぶ組み合わせである。なぜ分かってくれないか・なぜ分かろうとしないのかの原因は、「脳のとっさの使い方の違い」にあった。

□「話が通じない」の正体
脳の「問題解決のしかた」には二種類あり、問題が生じたとき、「ことのいきさつ（プロセス）」を反芻して、根本原因に触れようとする人と「今できること」に意識を集中して、できるだけ早く動き出そうとする人がいる。これを気持ちと記憶を語る共感型と事実と問題点を語る問題解決型と位置付けられる。

立場によって話法の選択が違い、上司は問題解決型、部下は共感型となる。共感型回路は、右脳（感じる領域）と左脳（顕在意識）の連携であり、「目の前の人の意に沿いたい」と思うときなどに共感型の回路が起動してしまう。この二つの型が混在してしまうと、コミュニケーションストレスが起こり、「共感型」は人間性の欠如を感じ、「問題解決型」は知性の欠如を感じてしまう。

□対話の奥義
人の話は共感で聞き（分かってくれる余裕がある）自分の話は結論から話す（話が早い・頭がいい）とよいということになる。

□共感型対話のコツ
とにかく「いいね」か「分かる」で受けるようにする。これをポジティブ・提案系とネガティブ・相談系に分けて考えると、状況説明が長すぎて、先を急がせたい時などは、ポジティブな話なら「君は？」ネガティブな話なら「何かあった？」などを付けるとよい。提案を受け入れないときなども「いいね」を付けてから主張することを心がける。
共感型と問題解決型では「提案」に対するセンスが違い、アイディアのプレゼントかｙｅｓの確認かの違いとなる。さらに、共感型にとって「検討」とは、感じることであり、問題解決型では、比較することである。

□問題解決型対話のコツ
結論から言い始め、その後でいきさつを述べる。また、言いにくい結論には、キャッチフレーズを付け、無理な仕事を断るときも、できることを（結果）から言うようにする。そして、質問は基本イエスかノーで投げかけるようにする。仕事をする際、基本、ルールを順守し、時に臨機応変力を見せるようにする。

□男性脳と女性脳
それぞれに、特徴を持ち機能している。

□対話力が問われる時代
人の話は共感型で聞き、自分の話は問題解決型で話すとよい。

◇講演概要については、令和五年三月発行の『小学校長研修記録一四八』に掲載

○謝辞
生田　敦　副会長

○閉会の言葉
小林　春彦　副会長

栃の葉

栃木県教育委員会

児童の資質・能力の確かな育成を目指して

学習指導要領が、全面実施となってから三年目を迎えました。
御案内のとおり、学習指導要領においては、学校教育を通じて一人一人の児童が持続可能な社会の作り手となるために必要な資質・能力を育成することが示されています。各学校においては、児童や学校、地域の実態を踏まえ、学校教育目標の重点化を図り、その達成に向けて教育課程を編成するとともに、児童の姿を具体的な資質・能力として捉え直し、その育成に向けた教育活動を行うことが大切です。
県教育委員会では、学習指導要領の着実な実施に向けた各学校の取組を支援するため、令和三年度から教育課程研究集会を実施しております。
教育課程一般部会においては、「『生きる力』を育む教育課程の編成・実施及び評価の工夫改善」の研究主題の下、特色ある教育課程の編成、指導体制の工夫、教育課程の工夫改善の三つの視点から、各学校における取組の課題解決に向けた方策等について協議等を通して研究を深めました。協議資料では、コロナ禍における制限された状況の中、教育目標達成に向け児童の学びの質の向上を図るための工夫・改善が多く見受けられました。
研究のまとめとして作成した動画では、そのポイントとして「学校として育成を目指す資質・能力の設定と重点化」を図った取組や、活動機会の可視化・定例化などの「組織的体制整備の工夫」、「資質・能力を踏まえた評価とマネジメントサイクルの効果的な運用」に関する特色ある取組を紹介しておりますので、どうぞ御覧ください。
各学校におかれましては、今後とも学校、家庭、地域の連携・協力の下、全教職員による児童の資質・能力の確実な育成に向けた取組の推進に御協力くださいますようお願いいたします。

地区だより

〔宇都宮地区〕

本地区では、活動目標を「自ら未来を創造し　ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す　学校経営の推進」とし、学校経営、働き方改革、ＧＩＧＡスクール構想対策など十のテーマに沿って研究を進めた。

七月の研修会では、全連小及び関ブロ群馬大会についての報告と班別研修を行い、各学校における様々な取組について紹介し合うと共に成果や課題を共有した。

また、十一月の上三川地区校長会との合同研修会では、文部科学省大臣官房国際統括官付国際戦略企画官白井俊氏から「国際的な見地に立った今後の日本教育の在り方」と題して講話をいただいた。

二月には、班別研修の集大成として各班の研究発表を予定している。

〔上三川地区〕

本地区では今年度の研究テーマを「危機管理」に設定し、研究を進めてきた。

十月には本地区小中学校合同の研修会に、栃木県教育委員会事務局学校安全課学校安全担当副主幹佐藤隆文様を講師としてお招きし、「学校現場における危機管理」と題して、御講話いただいた。組織活動と安全管理を中心とした学校安全の重要性を痛感するとともに、本年三月に文科省より出された「第三次学校安全の推進に関する計画」への理解を深めるきっかけになった。今後も学校安全における校長としてのリーダーシップが発揮できるよう研修を深め、関係機関の総力を結集して安全で安心な学校づくり、社会づくりを推進していきたい。

〔上都賀地区〕

本地区では、研究主題を県の基本目標と同一の「自ら未来を創造し、ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す学校経営の推進」と設定し、鹿沼市と日光市で連携しながら研修に取り組んでいる。鹿沼市は「ともに学び続け心豊かに生きる子どもの育成を目指す学校経営の推進」を、日光市は「校長の資質の向上と様々な課題への対応～学校経営、人材育成等～」をテーマとして研修を展開した。

六月と一月の全体研修会では、講話、研究協議、各市の研究成果の発表等を行い、自己の資質・能力の向上に努めている。

〔芳賀地区〕

本地区では、小・中学校長全員が、「信頼される学校の実現を目指した学校経営の推進」という研究テーマの下、各学校の実情等を考慮した上で、課題の解明に努めた。

そして、その課題解明を進めていく上で共有したい視点として、「グローバル化と技術革新の進展及び家庭や地域社会の変化に対応し、保護者や地域から信頼される学校を実現するために、教職員の育成に効果的な組織運営と保護者や地域の理解を踏まえた特色ある学校を運営する上での学校組織のマネジメントについて実践例を基に、校長の役割と指導性について明らかにしていく。」とし、各自で自己研修を行った。

〔下都賀地区〕

本地区は、「未来を見つめながら学びに向かい学ぶ喜びを分かち合える子どもの育成」を研究主題に、各校で実践を推進した。⑴個別最適な学びに向けた取組、⑵自己有用感を高める教育活動、⑶学びに向かう教職員集団づくりの三つの研究の視点から、実践をまとめ、十一月の全体研修会で発表と研究協議を行い、各校の取組を共有した。

子どもたちの学びの充実や教職員の人材育成につながる学校運営や教育活動について、小さな地区である強みを生かして協議を深め、各校の特色ある取組を学び合うことができた。

〔下野地区〕

本地区では、県の研究主題に基づいた市の研究副主題を、『校長のリーダーシップの下で行う、学校の危機管理の充実』と設定し、研修や研究を進めてきた。

六月には、市小中義務教育学校長会の研修会として、市の顧問弁護士（弁護士法人ひととのや法律事務所）である田中真先生による講話を拝聴した。判例や事前アンケートの質問への回答による具体的な内容の講話を通して、学校問題の捉え方や対応の仕方について、学ぶことができた。

また、校長の危機管理対応の実践（校内体制、意識高揚、保護者地域との連携等）を共有し、今後に生かしている。

●●●●〔小山地区〕●●●●

本地区では、二班に分かれ、A班は「次代を担う管理職育成の在り方～管理職のバトンをつなぐ持続可能な学校経営に向けて～」、B班は「働き方改革に向けた校長としてのマネジメント」という研究主題の下、研修を行った。そして、一月の班別研究発表会で、その成果や課題を確認した。

七月には学校経営実践発表を実施し、九月には西真岡子どもクリニックの顧問である柳澤邦夫氏をお招きし、「特別支援の児童・生徒への療育の実際」の演題で講話をいただいた。また、四つの専門部による研修等の事業も行った。

●●●●〔栃木地区〕●●●●

本地区では、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』を実現するための学校経営の展開～一人一台タブレット端末の活用を通して～」を研修テーマに、四班に分かれて各校の実践発表、研究協議を行っている。

研究協議の視点は、(1)推進のための組織・運営の工夫(2)通常の授業等でのタブレット端末活用(3)双方向型のオンライン授業(4)タブレット端末を持ち帰っての家庭学習の四点である。

各校の実践をもとに協議し、情報を共有することで、タブレット端末の「利用」から「活用」へとステップアップを図っている。

●●〔塩谷南那須地区〕●●

今年度から塩谷と南那須両地区の校長会が統合し、会員数も三十名となり、新たなスタートを切った。

地区全体の研究主題を「自ら未来を拓きともに生きる社会を創る子どもを育む学校経営の推進」とし、六市町の校長会が、いじめ・不登校、GIGAスクール構想の実現、学力向上など、喫緊の教育課題についてそれぞれのテーマを設定し、研修を進めている。

また、九月には全体研修会を開催し、栃木県総合教育センター所長の大高栄男様から、「学び続ける教職員の育成に向けて」と題した講演をいただくなど、校長としての資質・能力の向上に努めている。

●●●●〔那須地区〕●●●●

本地区では今年度より新たな研究主題を設定し、三年間の研究を開始した。

「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の全体主題を踏まえ、大田原市、那須町、那須塩原市の三市町がそれぞれの実態に合わせた研究主題を設定し、研究を推進している。十一月には全体研修会の場で発表し合い、研究二年目への布石とするとともに、学校経営における校長の果たすべき役割と指導性について考察を深めた。

令和六年度の「関ブロ長野大会」を見据えつつ、予測困難な時代に対応できる力を育む学校教育の在り方について、今後も「オール那須」で研究に取り組んでいく。

●●●●〔佐野地区〕●●●●

今年度、本地区では「若手教員を育てる人材育成の在り方～令和の日本型教育に向けた持続可能な学校運営体制の構築に向けて～」という研究主題を設定し、共通テーマについて、四つの班に分かれて、それぞれに研究を進めた。

市内の新型コロナウイルス感染症拡大もあり、校長会議もオンラインでの実施となるなど、予定どおりに研究を進めることが難しい状況もあったが、数回の班別協議の実施により、各校で実践を進める上でヒントとなる情報を共有でき、回数は少なくとも意義深い研修となった。同一テーマなので重複する内容は多いが、紀要は班ごとのまとめをそのまま集める形とした。

●●●●〔足利地区〕●●●●

本地区では、本年度も県小学校長会活動目標である「自ら未来を創造し　ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す　学校経営の推進」を受けて、八つの具体目標をキーワードとして研修を進めてきた。本地区二十二の小学校を三つの班に分け、共通のテーマとなった「働き方改革の推進」を中心に、各校での実践や取組についての意見交換を中心に研修を行った。

また、小中学校合同研修会において、市教育委員会指定の学習指導研究学校の三年間にわたる実践発表や、足利市の学校における同和教育に関する講話をいただき、大変有意義な研修会となった。

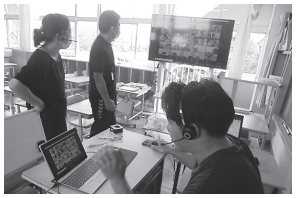
自ら未来を創造し　ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す学校経営

コロナ禍での学校経営

壬生町立睦小学校　安武　裕一

本校は、壬生町のほぼ中心に位置し、児童数二百七十五名、職員数三十七名の学校である。児童数は年々減少傾向であるが、学区内に大型店舗（コストコ、カインズ等）が今年六月にオープンし、新しい道路が整備され、区画整理が進み、今後、新築住宅が約三百戸増加する予定で、児童数の増加が見込まれる。最近毎年のように新採が赴任し、経験年数が十年以下の教員が多く、活気に満ち溢れている。明るく素直な児童が多く、学力調査等では毎年全国平均や県平均を上回っており、保護者の学習に対する関心も高い地域である。

そんな中、本校では、一昨年度から、ＩＣＴ教育を推進しており、組織づくりや研修会などを通して、授業でいかに効果的に活用できるかを計画的に進めてきた。児童には、「まずタブレットに慣れること。そして筆記用具のようにいつでも日常的に活用できること」を目標に、その環境作りに力を入れてきた。また、全ての教科の授業で、どのように有効活用できるかを職員間でアイデアを出し合い、職員研修や普段の情報交換を通して、児童同様、教職員のスキルアップを図った。週に一回と夏休みにもタブレットを持ち帰らせ、家庭学習でも、それを意図的に活用させた。コロナ禍で緊急事態宣言期間中の学校休業や一部の学年休業等のときもスムーズにオンライン授業を実施することができたのもこのような背景があったからである。私自身、オンライン授業を通して、メリットやデメリットを把握できたことは大きな収穫であったが、何よりも感銘を受けたのは職員間の協力体制と団結力である。困った職員がいれば全員で補佐し、新たな発見があれば全職員で情報共有する体制、そして子供たちのために、一生懸命に授業に取り組む教職員の姿勢と使命感、睦小のすばらしい職員に感謝の気持ちしかない。コロナ禍で何かと不便の多い今日だからこそ、全職員で知恵を出し合い、ピンチをチャンスに変え、明るい未来を共に切り拓いていきたいものである。


３年生　オンライン授業

職員研修

ふるさとへの愛着と誇りをもった児童の育成を目指して

栃木市立赤津小学校　植木　裕子

本校は、栃木市の北東部に位置しています。南東部に広がる平地と北西部の山稜、学校西を流れる赤津川など、豊かな自然環境が大きな特色となっています。「自ら学び、豊かな人間性をもち、たくましく生きる児童の育成～勉強する子・思いやりのある子・元気な子～」を学校教育目標に掲げ、「子どもたちにとって楽しい学校」「保護者・地域社会から信頼される学校」「教職員にとって魅力ある学校」を目指し、実践を積み重ねています。

学校の西を流れる赤津川周辺支流には、ゲンジボタルをはじめ、カワセミ、サギなど多種にわたる野鳥、学校のシンボルとなっているカエルなど、多くの生き物が棲息しています。平成六年から三年間、県より「愛鳥モデル校」の指定を受け、児童会や愛鳥クラブを中心に「野鳥の生態観察」に取り組んだ実績があります。その後も、「愛鳥活動」として引き継がれ、現在は、毎年一月に日本野鳥の会から講師をお招きし、赤津川周辺において探鳥会を行い、野鳥の観察を通して、その特徴や生態について学んでいます。さらに、野鳥が棲みやすい環境づくりにも目を向けることで、赤津地区の環境保全について考え、自分たちにできることを話し合い、実践するなど豊かな自然環境を生かした特色ある教育活動に取り組んでいます。

また、本校では、地域の方々の協力を得ながら、各教科等において様々な体験的な学習を数多く行ってきました。コロナ禍において実施が困難な活動もありますが、生活科での地域探検、総合的な学習の時間での盲導犬教室、社会科での田植え・稲刈りなど、地域の方々とふれあう中で、子供たちは地域に誇りをもち、地域に感謝をする心が育っています。

本校の教育は、地域の豊かな自然、地域の教育力に支えられて成り立っています。今後も、ふるさとへの愛着と誇りをもった児童の育成に取り組むとともに、地域における赤津小学校の存在意義を考えながら、地域とともにある学校づくりを目指していきたいと思います。

赤津川での野鳥観察

特色ある学校づくり

つながりを大切にした教育活動の推進

上三川町立本郷小学校　鷺嶋　優一

本校は、児童数百三十九名、七学級の小規模校です。今年度で創立百四十九年を迎えました。学校は、東側に鬼怒川が流れ、宇都宮市・真岡市に隣接した田園地帯にあります。

本校ではこれまで「つながり」を大切にした教育が長年行われてきました。その中でも特徴的な三つの活動をご紹介します。

まず一つ目は、「創意を生かした児童会活動」です。代表委員会において各学年から出された諸問題の解決案やよりよい学校づくりのアイデアをできるだけ実現できるよう教師がサポートしています。例えば、「給食中のＺＯＯＭを活用したオンライン放送」「学校のイメージキャラクター『ごうちゃん』の作成」「あいさつ運動」「ＳＤＧｓ啓発活動」などです。アイデアが生かされることにより、自発的・自治的な活動が充実しています。

二つ目は、異学年交流です。高学年児童は大変面倒見がよく、縦割り班での清掃やさつまいも栽培、通学班での登下校などでよりよい人間関係が築かれ、休み時間は、ごく自然に学年を越えた交流が生まれています。

三つ目は、ＰＴＡ・地域の協力体制です。コロナ禍で学校行事が大きく制限された令和二年度から、ＰＴＡ執行部の発案で始まった「バルーンフェスタ」は今年で三年目となります。また、毎年一回のＰＴＡ奉仕作業については、今年度「ピカピカ大作戦」として親子で参加できる形態で実施し、大変好評でした。

このような活動を通して、児童の主体性が豊かに育まれています。その基盤となっているのは、地域との温かいつながりであり、この地域性が学校教育にも生きていることを日々感じています。

バルーンフェスタ

PTA奉仕作業ピカピカ大作戦

文武両道目指してがんばります

佐野市立界小学校　秋山　広美

本校は、佐野市最南端に位置し、大型ショッピングセンターなどがある商業地域と農業地域があります。学校自体は農業地域にありますが、全校児童の半数以上は商業地域から通っています。全児童は三百七十三名で、特別支援学級四学級を含む十六学級の構成です。

今年は、学力向上、体力向上、地域連携の三点を本校の特色として推進しています。

○視写旬間

本校では、学校研究課題として「自分の考えを豊かに表現できる子どもの育成」と設定し、表現力を育成するための環境整備や学習活動の充実を図っています。その一環として毎月第一週と第二週の十日間を「視写旬間」と位置づけ全校で視写に取り組んでいます。朝の活動や国語の書写の時間を活用して、書く力の様々な技能をプリントで学習しています。根気強く継続することで、書く力やその他の表現力の向上につながることを期待しています。

○全国体力調査項目の継続的なドリル練習

本県では、小中学生の体力調査結果が思わしくない傾向が続いていますが、特にコロナ感染対策により、スポーツに親しむ機会が減少することで、体力低下が深刻化しています。本校では、調査項目を中心に業間の時間を活用して継続的に練習することで、体力の諸要素の底上げを図っています。また、悪天候の日には本校独自のヨガを各教室で行い、心身のリフレッシュも図っています。

○地域コーディネータの積極的な活用

校内の地域連携教員と地域コーディネータが同じ方向を向き、役割分担を明確にしながら、有機的に連携活動を行っています。児童の学習支援はもとより、校内の消毒や休日の校庭整備など、学校運営を支える形で関わっていただき、学校にとって大きな助けになっています。

今後も、地域の皆様の力をお借りして、素直でのびのびとした児童の育成に取り組んで参ります。

業間の時間の活用

ミシンボランティアの活動

話題の広場

願いはかなう

鹿沼市立池ノ森小学校
森山　泉恵

本校の伝統行事「池小まつり」の練習が始まった。今年度は、願いをもつ児童が実行委員となり、行事の企画・運営を行っている。種目の中で一番の難題は英語劇だ。担当教員と昼休み等に打合せを重ね、台詞の英訳と配役を行っていった。ステージで初めて全体練習をしたときは、四名の実行委員が進行を務め、読み合わせと立ち位置の確認を行った。上手とは言えずとも、声を掛け合って自分たちの務めを全うしようとする姿に心打たれた。そんな実行委員に、文句一つ言わず練習に参加した児童全員の様子にも感動した。練習後、実行委員は「最初、もたついたから六十点」とふり返った。ちゃんと分かっている。指示がうまくいかないことをよく自覚していた。「次は、もたつかないでがんばって」と伝えると、「九十点目指します」と返ってきた。

今年度のテーマは「願いはかなう」…願いは自分たちでかなえる約束である。我々教職員は、手を出したい、口を挟みたい衝動を抑え、サポーターに努めている。

小山二小歴史館

小山市立小山第二小学校
柏田　佐智子

本校は創立百十八年目を迎える。開校当初は女子児童のみの尋常小学校であったが、大正の頃には女子実業補習学校（現小山城南高等学校）を併設していたそうだ。また、初代校長が植樹した「辛夷の木」はシンボルツリーとして、地域住民の方々にも愛されてきたという。

このような歴史を大切にしようと平成二十六年当時の校長が中心となって、空き教室一つを、畳敷きの「小山二小歴史館」に造り変えた。歴史館には、明治・大正時代の卒業写真や各種優勝旗等が展示してあり、子どもたちは、生活科や総合的な学習の時間に利用して、自分の学校の歴史を学んでいる。卒業の時に、思い出深い場所として歴史館を挙げる子どもも多い。

今後も、在学中の子どもたちはもちろんのこと、多くの卒業生や地域住民の方々の心の拠り所となるように歴史館の充実を図っていきたい。

事務局だより

事務局長　吉成　隆志

県内各地区からの要望や提案を総務部でまとめた提案事項について、新型コロナウイルスの感染防止策を講じながら、八月四日に県教委との教育懇談会を実施しました。その詳細については、十月の第三回理事研修会で報告し、また県小学校長会ホームページに掲載しましたので、ぜひご覧ください。

昨年度後半より準備をしてまいりました「創立七十五周年記念式典・研究大会・記念講演会」が、役員及び係員の皆様のご協力のお陰で予定通り十一月十日に無事に開催することができました。ご支援・ご協力に心より感謝申し上げます。現在、二月に発刊・配付予定の記念誌の編集作業中です。間もなく会員の皆様のお手元に届く予定です。

新型コロナウイルス感染症の収束の見通しが全く立たない今、学校運営は非常に困難な状況ですが、こんな時こそ県小学校長会のネットワークを活用して会員の皆様で情報を共有し、乗り越えていければと考えています。

編集後記

本校は、令和六年度に創立百五十周年を迎えます。校長室に掲示してある歴代校長先生の写真や、継続して残っている教育理念や本校伝統の教育活動などから、今までの校長先生方の学校経営の積み重ねの上に、今日の学校が成り立っていることを思います。

そして、こうした歴史の上に、これからの教育の方向性や、新しい学校の生活様式に対応した学校経営を行っていく使命を感じます。

栃木県小学校長会においても、創立七十五周年を迎えた節目の年に、改めて諸先輩方のご功績に敬意を表するとともに、今後も会員の皆様とのつながりを大切にして、自分の職責を果たしていきたいと思う次第です。

本号発行に際し、玉稿をお寄せいただきました皆様に心より感謝申し上げます。

下野市立国分寺小学校
髙橋　修一